

教職大学院

Newsletter No. 99

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2017.6.23

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル

2017 Summer Sessions 特集号

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Summer Sessions 2017
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル

2017 summer sessions

6/23(fri) 17:30-18:40

24(sat) 13:00-17:40

25(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V (教育系1号館) / AOSSA

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究
学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2017.6.23-25

教師教育改革コラボレーション/福井大学教職大学院

大学院教育学研究科教職開発専攻
共催 福井大学高等教育推進センター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム
後援 福井県教育委員会・福井観光コンベンションビューロー

内容

ラウンドテーブルによるこそ (2)

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル

Pre-session

ZoneA 学校 (3)

ZoneB 教師 (4)

ZoneC コミュニティ (6)

ZoneD 授業 (7)

省察的実践学会 発足に向けた第2回準備会 (8)

round table cross sessions (8)

実践し省察するコミュニティを結び支える (9)

ラウンドテーブルの広がり と 深化 (11)

ラウンドテーブルの歩み (12)

アーカイブ (14)

基金のお知らせ /スケジュール (24)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2017年6月の開催をもって33回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。初日のプレセッション、2日目には学校（Zone A）・教師（Zone B）・コミュニティ（Zone C）・授業（Zone D）の各領域に分かれたセッションを展開し、そして最終日のクロスセッションでの語り合い・聴き合いへと続きます。この3日間が、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることに、スタッフ一同大きな期待を持っています。

ラウンドテーブルによるこそ

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻長 柳澤 昌一

実践研究福井ラウンドテーブル2017 summer sessionsに参加いただき、ありがとうございます。

16年の年、33回の積み重ねの中でつねに展開し続けているラウンドテーブルですが、大切にしていること、願っていることは変わりません。実践の長い歩み、そのプロセスをじっくり語り、聴き合い、互いに問い深める時間と空間を生み出したいということです。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

それぞれの分野では、固有の技術や言葉や型を彫琢していますが、実践のプロセス、それを通じた実践者としての学習と成長の道筋に関心をもって聞けば、そこには分野を超えて共有できる、されるべき実践の中での知とその成長のストーリーが紡がれていることに気がきます。そして、そこで捉え返され共有される長い実践展開のストーリーが、次の自他の実践の展開を支えるフレームとして生きて働いていくことを実感してきています。その時ラウンドテーブルは、一過性の集会ではなく、それぞれの実践のコミュニティでの営みとその意味を問い返し、その持続と発展を支える省察的なコミュニケーションのためのメタコミュニティとして働き続けていることとなります。

こうした省察的なコミュニケーションとそのコミュニティを通して、地域を越え分野を超え、しかもそれぞれの分野の実践の長い展開に根ざした協働探究の可能性がひらかれるならば、それぞれの実践の蓄積と多様性を活かしたパブリックなコミュニケーションを編んでいく可能性につながっていくのではないか。それは公教育(Public Learning)とその理念への問いと、それぞれの持ち場での日々の実践との見失われた環を問い直す、編み直すプロセスにもつながっています。その問いは、教育学部・教職大学院の存在する根本的な理由に根ざしています。

プレセッションから多様なサイクルの積み重ねを通して、互いの実践の展開を跡づけ、意味を共有し、次の展開へと視界をひらいていく3日間にできたらと思います。

語り手以上に聴き手の力が問われるラウンドテーブルです。今回もまたセッションを通してプロセスを追う力を培っていきたいと思っています。どうかよろしくお願い致します。

6/23 (fri) 17:30-18:40 会場：教育系1号館 6階コラボレーションホール

Pre-session 教職大学院におけるプロセスコンサルテーション

6/24 (sat) 13:00-17:40

学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

Zone A 学校

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ 支え合うコミュニティに向けて

会場：教育系1号館 2階 大1講義室 / 1階 11, 13 講義室

これまで Zone A では、「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」というテーマのもと、「専門職の学び合うコミュニティ」として学校が共有ビジョンのもとで発展していくのための、教師の協働の在り方について議論を積み重ね、その重要性を様々な角度から確認してきました。前回2月の実践研究福井ラウンドテーブル2017Spring Sessionsでは、「支え合うコミュニティに向けて」というサブテーマのもと、幼児教育、初等教育、特別支援教育の視座から「支え合うコミュニティ」の中で特に若い世代の学びと成長をいかに支え促すのかを議論しました。この議論を受けて、今回の実践研究福井ラウンドテーブル2017Summer Sessionsでは、若い世代だけでなく、新たに学校に異動あるいは着任する新たな同僚の学校間文化移行とそこでの文化学習をいかに支え促すのか、その具体的な実践と指針について考える「新しい世代を支える」をサブテーマに設定し、参会者の皆様とともに議論を進め深めていきます。

Orientation 13:00-13:10 <教育系1号館2階 大1講義室>

Session I 13:10-14:10 ナレッジ・フェア（ポスターセッション） <教育系1号館 1・2階 フロア>

Session II 14:20-15:50 シンポジウム <教育系1号館2階 大1講義室>

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ：新しい世代を支える

<シンポジスト> 長野県伊那市立伊那小学校 教諭 佐々木 英明 氏

同志社中学校 教頭 沼田 和也 氏

<コーディネーター> 福井大学教職大学院・准教授 木村 優 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム <1号館1階 11, 13 講義室>

Zone B 教師

21世紀の教師教育をイノベーションする

B1 教員研修体系の新たな構築と今後の展望「変わる教員研修」

:教職大学院と教育研修センターの有機的連携

会場：教育系1号館 6階コラボレーションホール

教員の資質・能力の向上を目指す制度改革については、文部科学省も平成27年12月の中教審の答申において、教育委員会、学校、大学等が目標を共有してお互い連携しながら、次期学習指導要領等に向けて教員に求められる力を効果的に育成できるよう、教育委員会と大学等との協議の場の設置や教員に求められる能力を明確化する教員育成指標、それらを踏まえた研修計画の策定などを実施することとし、教員研修自体の在り方を、「アクティブ・ラーニング」の視点で見直すことなども提言しています。本学教職大学院と福井県教育委員会も、本年度よりこの提言の主旨に賛同し、これまでの教員研修を見直し、新たな体系の構築に協働で取り組み始めたところです。

こうした教職大学院と自治体の連携の動きは、福井県だけでなく国内各地でも始まっていますが、新しい試みであるだけに、教員の資質・能力の向上を目指してより効果的な研修体系が構築できるよう、試行錯誤しながら、有機的な連携を模索しているというのが現状です。

本シンポジウムでは、連携を始めた国内各地の教職大学院と自治体の関係者から新しい教員研修体系構築の現状を報告していただき、その構築の在り方を検討し合いながら、今後の展望を探っていきたいと考えております。

Orientation	13:00-13:10	<教育系1号館6階 コラボレーションホール>	
Session I	13:10-14:10	ナレッジ・フェア（ポスターセッション） <教育系1号館 1・2階フロア>	
Session II	14:20-15:50	シンポジウム <教育系1号館6階 コラボレーションホール>	
		<シンポジスト>	北海道立教育研究所企画・研修部長 中澤 美明 氏
			兵庫教育大学教職大学院教授 押田 貴久 氏
			やまぐち総合教育支援センター所長 竹本 芳朗 氏
			福井県教育総合研究所教職研修センター長 鈴木 利英 氏
			福井県立三国高等学校・校長 斉川 清一 氏
			福井大学教職大学院教授 三田村 彰 氏
		<スーパーバイザー>	文部科学省教職員課課長 齋藤 光次郎 氏
		<コーディネーター>	福井大学教職大学院教授 倉見 昇一 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム <教育系1号館6階 コラボレーションホール>

Session II シンポジウムでの議論を受けて、参会者の皆様とともに協働チームで問いと議論を深めていきます。

B2(a) これからの学部段階の教員養成を考える / 実践を聴き、夢を語る

会場： 教育系 1号館 1階 11 講義室 / 2階 コミュニティプラザ

教員養成をめぐる制度の見直しへの提起が重ねられ、とりわけ教職免許法の改正にともなうカリキュラムの改変が求められてきています。しかし、長い蓄積の中で培われてきた組織の中で、新しい課題への取り組みを進めていくことには大きな困難がともないます。それぞれの実践と経験を活かした、当事者としての知恵が問われてきていると思います。

こうした問題意識を背景とし、昨年6月に開催されたラウンドテーブルから、学部の教員養成に携わる当事者が、互いの取り組みを聴き合い、語り合う新しいセッションが立ち上がりました。大学における教員養成をどのように支え、また今後に向けて発展させていくのか。さまざまな背景と専門を持ち、学部での教員養成に携わっている 当事者同士、現実の中での互いの取り組みを聴き合い、語り合う場を創っていききたいと思います。

前回同様今回も、少人数で多様なメンバーが大学を超えて教員養成の取り組みを聴き合うことを中心に据えたいと思います。それぞれの取り組み、そこでの工夫、あるいは課題や悩みも含めて共有し学び合いながら、これからの学部における教員養成への夢を、当事者としてふくらませていくことができればと思います。互いの現実とそこでの取り組みを聴き合うことを通して、また夢を語ることを通して、さまざまなキーワードがセッションの中で浮かび上がってくる。それをさらに次回のセッションにつないでいきたいと思っています。

〈報告担当校〉 東京家政大学 富山大学 一宮研伸大学（中部大） 岐阜聖徳学園大学
 東北芸術工科大学 静岡大学 市立札幌大通高校 愛知きわみ看護短大
 神奈川大学 玉川大学 長崎大学 福井大学

B2(b) 学部学生のクロスセッション 授業/活動 ー語ろう・聴こう・出会い直そうー

会場： 教育系 1号館 1階 11 講義室 / 2階 コミュニティプラザ

大学における教員養成をどのように支え、また今後に向けて発展させていくのか。教員養成に携わる大学教員がこれからの学部における教員養成への夢を当事者としてふくらませていくためには、教員養成における学びの主体者である学生たちの思いや課題を知る必要があります。ZoneB2 では、こうした問題意識を背景に、前回2月に開催されたラウンドテーブルから、学生たちが「自分たちは、授業や活動を通して、何を学んでいるのか」を語り合い、聴き合うクロス・セッションが立ち上がりました。自分たちの取り組みをことばにし、また、他大学の学生の語りを聴くことを通して、授業や活動の中に潜在していた意味ある課題が浮かび上がってくることを期待しています。

〈報告担当校〉 東京家政大学 富山大学 中部大学 岐阜聖徳学園大学
 東北芸術工科大学 長崎大学 福井大学

Orientation 13:00-13:10 <教育系 1号館 1階 11 講義室>

Session I 13:10-14:10 ナレッジ・フェア（ポスターセッション） <1号館 1・2階フロア>

Session II・III 14:20-15:50 16:00-17:40 <教育系 1号館 2階 コミュニティプラザ>

小グループ形式で実践交流を行います。

Zone C コミュニティ

何がコミュニティの持続的な発展を支えているのか

会場：AOSSA レクリエーションルーム AB

これまで Zone C では、各地のコミュニティで長期にわたる実践の歩みとその展開を、その持続可能性をめぐる課題から検討し続けてきました。今回は、「何がコミュニティの持続的な発展を支えているのか」と題して、スタッフが入れ替わる中で、絶えず発展をし続けている取り組みに焦点を当てて、それらの組織マネジメントやコミュニケーション構造について事例を元に考えを深めました。

しかし、コミュニティの持続的な発展は、構成員の自助努力だけで可能となるのでしょうか。コミュニティ外のメンバーとも接点を持ちながら、自覚的に自身のコミュニティの価値や取り組みを問い直して行くことも不可欠ではないでしょうか。

今回の Zone C では、「異質との出会い」をテーマに、コミュニティの持続的な発展のために、コミュニティ外のメンバーとの出会いをいかにコーディネートし、活かしていくかについて考えていきたいと思えます。実際にコミュニティ外の視点でコミュニティの発展に尽力されている方と、その方を自身のコミュニティに迎えて、共にその発展に取り組もうとされている方の双方の方の取り組みを共有し、世代や立場を超えた多様なメンバーで考えを深めていきたいと思えます。今回はコーディネーター個人の力量ではなく、それぞれの取り組みの発展を持続可能なものにしていく仕掛けやコミュニケーション構造に目を向け、これからスタッフが入れ替わっても発展を持続させるためにどのような取り組みが求められるか、多様なメンバーで考えていきたいと思えます。

Orientation 13:00-13:10 <AOSSA レクリエーションルーム AB>

Session I 13:10-14:10 ナレッジ・フェア（ポスターセッション）

<AOSSA レクリエーションルーム AB>

Session II 14:20-15:50 シンポジウム <AOSSA レクリエーションルーム AB>

<シンポジスト> 福井市殿下地区地域おこし協力隊 高橋 要 氏

福井市殿下地区青年グループ d.o.d（福井市殿下公民館） 堂下 未来 氏

<コーディネーター> 福井大学教職大学院 富永 良史 氏

早稲田大学 村田 晶子 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム <AOSSA レクリエーションルーム AB>

Session II シンポジウムでの話題提供を受け、小グループで実践の交流を行います

Zone D 授業研究

子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

会場：教育系1号館 2階 大2講義室 / 203, 204, 206, 207講義室

大きな社会の変革が起きつつある中で、教育現場はさまざまな転換を迫られています。今回の学習指導要領改訂の動きの中では、「社会に開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメント」「主体的・対話的で深い学び」といったキーワードが並び、これらを実現するためには「地域と連携」した「チームとしての学校」で「生涯にわたって学び続ける」教師が求められてもいます。こうした中で、授業研究・保育研究は決定的に重要になるといえ、校内・園内で、専門職として協働して学び合う教師集団をいかに組織していくかが問われています。

こうした背景のもと、これまでZoneDでは、子どもと教師の学びを支えるための授業研究について考えてきました。地域や学校の状況が異なる中で、その組織の在り方は多様であり、長い時間をかけて取り組んでいかざるを得ないものと思います。そこで今回も引き続き、学習指導要領改訂を見据えて、子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織していったらいいのか、考えていきます。

「シンポジウム」では、幅広い校種の先生方に登壇いただき、これから求められる学びの在り方や教師コミュニティの在り方等のいくつかの論点を取り上げて、それぞれが取り組んできたことやその中で掴んできたことをざっくばらんに語り合う形で進めます。

ここで出てきたことを踏まえて「フォーラム」では、参加者がそれぞれの現場で何ができるかを考えていくために、大まかに校種や領域で部屋を分かれます。それぞれの分科会で話題提供者から具体的な実践を簡単に紹介いただいた上で、小グループで話し合い、深めていきたいと思えます。

Orientation 13:00-13:10 オリエンテーション <教育系1号館2階 大2講義室>

Session I 13:10-14:10 ナレッジ・フェア（ポスターセッション）<教育系1号館 1・2階フロア>

Session II 14:20-15:50 シンポジウム<1号館 2階 大2講義室>

「これからの授業研究・保育研究をいかに組織するか～次期学習指導要領を見据えて」

〈シンポジスト〉 福井県教育委員会 指導主事 観 寿子 氏

福井県小浜市立口名田小学校 教諭 正木 啓敬 氏

福井県美浜町立美浜中学校 教諭 八木 康文 氏

〈コーディネーター〉 福井大学教職大学院 准教授 岸野 麻衣 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム <教育系1号館2階 203, 204, 206, 207講義室>

「多様な授業研究・保育研究から学び合う」

A. 保幼小の実践に学び合う

上中 美智子 氏 吉本 典子 氏

(福井県美浜町立あおなみ保育園・せせらぎ保育園・みずうみ保育園)

上原 博光 氏 (長野県長野市立南部小学校)

B. 中高の実践に学び合う

猪 晃一郎 氏 (長崎県波佐見町立波佐見中学校)

片桐 哲也 氏 (福井県立足羽高等学校)

C. 特別支援教育の実践に学び合う

松村 千里 氏

(大野市児童サービスセンター／平谷子ども発達クリニック)

E. 国境を越えて学び合う

フィリピン・オーストラリア・コロンビア・ブータン等からの教員留学生

18:00-18:40

会場：教育系1号館6階 コラボレーションホール

省察的実践学会 発足に向けた第2回準備会

個々のコミュニティ・分野・領域を超え、実践の知を通わせ、結んでいく。そのための新しい実践研究の交流の場を拓く。そうした新しいコミュニケーションの場を目指して、2016年6月に〈省察的実践学会〉の呼びかけをはじめ、以来、多くの方に賛同いただき、さまざまなコミュニティ・分野・領域から発起人・会員が集まりつつあります。2017年2月のラウンドテーブルにおいても正式な発足に向けて第1回準備会を行い、学会の趣旨を共有しました。今回も、6月のラウンドテーブルの機会に、規約や運営、学会誌「省察的実践研究」準備号に向けて原案を共有し意見交換をするセッションを持ちたいと思います。関心をお持ちの方はぜひ参加ください。

6/24

(sun) 8:20-14:00

Session IV 実践の長い道行きを語り展開を支える営みを聞き取る

Round Table Cross Sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

8:20 1号館1階ロビーで受付をお願いいたします。参加するグループを確認してください。（グループは、多様なメンバーが交流できるよう、運営委員会で設定いたします。）

- | | | |
|-------|-------------|--|
| ①はじめに | 8:30-8:40 | ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。 |
| ②自己紹介 | 8:40-9:00 | それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。 |
| ③報告Ⅰ | 9:00-10:40 | 実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたらと思います。 |
| ④報告Ⅱ | 10:40-11:40 | グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、この時間帯に、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。 |
| ⑤報告Ⅲ | 12:20-14:00 | 報告Ⅲのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等は行いません。 |

ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える

2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かそうような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実はある。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の

展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてののみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えはじめています。

(柳沢 昌一 『教職大学院ニュースレター』 No.11, 2009.3.31)

ラウンドテーブルの 4 重の意味

4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice
I II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning
Communities for Reflective Practitioners

分散型コミュニティへの挑戦 ラウンドテーブルの広がり と 深化



2001年3月、約20名の実践者や研究者が集まり、「教師の実践的力形成をめざして」というテーマのもとで互いの教育実践と教育実践研究を交流し合う研究会が催された。ここで放たれた熱き議論が「実践研究福井ラウンドテーブル」の産声である。それから14年間もの間、「実践研究福井ラウンドテーブル」は福井県内外と国内外のコミュニティとの往還を絶え間なく積み重ねながら、21世紀の教育を支援するための実践コミュニティを真摯に耕し続けてきた。このたゆまぬ挑戦と努力の成果として、会を重ねるごとに「実践研究福井ラウンドテーブル」への参会者の増加が挙げられるとともに、参会者による実践報告の内容や質の多様化が挙げられる。「実践研究福井ラウンドテーブル」の創世記には少数の実践者の報告のみだったが、現在では研究者も自らの「実践」を報告し、さらに地域コミュニティの人々も自らの取組とその実践的意味を探究するために実践報告を行うようになった。この間、国際的な教育研究の前進を足がかりとしながら、教育の質保証と学びの転換を目指す多種多様な教育改革の施策や取組がなされてきた。その全ては、21世紀の知識社会に生きる子どもたちの幸せを保障するための挑戦であり、子どもたちの成長を支える全ての教育関係者の実践を支えるための挑戦である。「実践研究福井ラウンドテーブル」はこれらの挑戦を促し支えるための省察的機構としての実践コミュニティである。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの文字通り「実践の省察」を促し支えることをビジョンとする。このビジョンを基盤とした「実践研究福井ラウンドテーブル」には、日本全国や世界各地から多数の実践者や研究者が集まる。当然、彼ら／彼女らは「実践研究福井ラウンドテーブル」とは異なるコミュニティ、あるいは複数のコミュニティに属しており、それぞれのコミュニティ内でイノベーションを生み出す実践に挑戦している。つまり、「実践研究福井ラウンドテーブル」はローカル・コミュニティが集合する大きな、コミュニティの「坩堝（るつぼ）」なのである。もしも、このコミュニティの中で数多あるローカル・コミュニティが有機的に結びつき、そこ

でコミュニティ間の相互作用が加速化すると何が起きるのだろうか。それはおそらく新たな「知」の創発であり、新たな「かかわり」の生成であろう。これら新たな「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、現代社会を取り巻く困難や格差を突破するためのいくつかの「解（ソリューション）」が生み出される可能性が高まる。ただし、このダイナミクスを大きくし、このダイナミクスの質を深化させるためには「戦略」が必要になる。ただ指をくわえて待っているだけではダイナミクスやイノベーションは起こらないのである。

福井大学教職大学院はこれまでの「実践研究福井ラウンドテーブル」で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携し、「分散型コミュニティ」の設計に着手し始めた。日本全国そして世界各地にあるコミュニティの相互作用と化学反応を生み出すためには、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことが可能な「分散型コミュニティ」を設計することが肝要である。複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そこで互いの課題や問題を同定し、それらの解決策を考案し、共有可能な「知」を蓄積することが可能になる。「分散型コミュニティ」への挑戦とはつまり、「グローバル・コミュニティ」を築くための挑戦なのである。

2014年度には福井大学教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島で共有された理念とビジョンに基づく「ラウンドテーブル」が開かれた。この「ラウンドテーブル」の広がり と 各地で放たれた息吹は、日本の教育実践を支える新たな「省察的機構としての実践コミュニティ」の産声である。そしてこの実践コミュニティの足音はすでに様々な地域で共振している。この実践コミュニティは、おそらく日本の教育界ではじめて戦略的に組織化された「分散型コミュニティ」であり、今後数年あるいは十数年で「グローバル・コミュニティ」へと深化・進化することだろう。

(木村 優『2014年度 教師教育改革コラボレーション報告書 ラウンドテーブルの広がり と 深化』2015.3.31)

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2017.6

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして
木岡一明・寺岡英男(この回は教師教育をめぐる20人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった)
- 2001.11.10-11 実践研究:福井ラウンドテーブル 省察的実践を支える協働(第1回)
For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第1回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。(参加者20数名)京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第2回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ~現在に至る
- 2002.7.13-14 実践研究:福井ラウンドテーブル(省察的実践を生み出す 学び合う組織を編む)(第3回)
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第4回)
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究:福井ラウンドテーブル(第5回)
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル(第6回) 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ: 実践研究福井ラウンドテーブル 2004 (第7回)
- 2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる(於熱海~2009)
- 2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる(於早稲田大学)~現在に至る
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2005(第8回 参加者100名超)
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル 2005 (第9回)
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2006 フェニックス・プラザ (第10回)
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2006 (第11回)三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007(第12回)渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
- 2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2007 (第13回)藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008(第14回)横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル 2008(第15回)人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009 (第16回)稲垣忠彦
- 2009.6.27.28 実践研究福井ラウンドテーブル 2009(第17回)5つの領域:専門職として学び合うコミュニティ
(分野ごとのセッション始まる)

- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010 (第 18 回参加者 300 名前後)鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル 2010(第 19 回):学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 20 回 参加者 300 名を超える)門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2011(第 21 回)松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
- 2012.3.3-4 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions (第 22 回)(名称を変更する)
- 2012.6.23-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions(第 23 回) 参加者 450 名を超える
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions (第 24 回)教師教育改革コラボレーションとの共催
- 2013.6.29-30 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions(第 25 回)
- 11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013winter sessions(明治大学)
- 2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム(宇都宮大学)1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
- 2014.3.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第 26 回)参加者 550 名を超える
- 2014.6.21-22 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions(第 27 回)
- 11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
- 11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
- 2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム , 3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions(第 28 回)参加者 700 名を超える
- 2015.6.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions(第 29 回)
- 11.21 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
- 11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 12.6 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
- 12.19 教育実践福島ラウンドテーブル, 2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム ,
- 2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2016.2.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions(第 30 回)参加者 800 名を超える
生徒ポスターセッションを開催
- 2016.6.24-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions(第 31 回)参加者総数 547 名
- 7.8 記念講演&シンポジウム(和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル)
- 11.12 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
- 11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
- 2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
- 2017.2. 17-19 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions(第 32 回)参加者 800 名を超える
特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催。省察実践学会の発足

Archive —アーカイブ—

ラウンドテーブル 2011 Spring Sessions と 2017 Spring Sessions に参加していただいた方の報告を、Newsletter No.30(11.04.02)と No.97(17.6.9)からご紹介いたします。

[Newsletter No.30\(11.04.02\)より](#)

専門職として学び合うコミュニティを培う

東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻

教育心理学コース 三輪 聡子

Zone A では、「専門職として学び合うコミュニティを培う」というタイトルのもと、富山市立堀川小学校と福井大学附属中学校の先生方から、その実践と教育理念に関するお話を伺った後、全体討議を行った。討議は多様な観点から進み、実に多くの事柄について議論が行われたが、全てについてここで述べることは難しい。そこで本文では、二つの学校の実践報告を踏まえた上で、報告と討議の中心にあった、教師の「コミュニティ」、「繋がり」について考えてみたいと思う。セッションでは、教師を取り巻く数々の「繋がり」についてのお話を頂いたが、それらは大きく分けて三つあるのではないかと考えられる。第一は、教師同士の「繋がり」である。堀川小学校の実践報告では、授業実践において、ベテランの先生に夜遅くまで相談にのって頂いたという新任の先生のエピソードを聴かせて頂いた。また、福井大学附属中学校の報告からは、自分がわからないと思ったことを、同僚にわからないと相談できる環境の大切さについてのお話を頂いた。両学校共に、同僚の先生方とのあたたかな関係性を基盤とした上で、学びへの新たな挑戦を行う意欲が個の教師の中で培われていた。教師同士がオープンな状態でいられることにより、それぞれの知を通わせて、更に大きな学びの創造に繋げていくことができているのではないかと感じられた。

第二に、子どもと教師間の「繋がり」が挙げられる。子どもを「みとる」という言葉が繰り返し、討

議の場で登場していたが、子どもに寄り添った学びを創り上げていく上で、子どもと教師の間に繋がりを形成することの重要性が実践報告で述べられていた。堀川小学校の先生の「担任の教師よりも子どもの事を知っている」という言葉が非常に印象に残っている。子どもを子ども全体として理解するのではなく、個々の存在として認め、教室の中からひとりひとりを見つけ出していく。この意識の高さや子どもへの関わり方が、子ども自身の学びへの意識に繋がり、子どもと教師間におけるオープンな学びのキャッチボールを可能としていくのではないかと感じた。最後に学外との「繋がり」が挙げられるだろう。自身の学校での実践を言葉にすることによって、その実践を客観的に“振り返る”ことが出来る、と様々な学校の先生方がお話されていた。自身の実践を通して感じた事、考えた事を、学校の外の人に伝え、フィードバックをもらうことによって、もう一つの目から自分の気付けなかった新しい観点にアプローチする事が出来る。そして、また、言葉にすることで自身の中でもう一度その実践を感じ直す事が出来、実践時とは異なった学びや思いと出会うことが出来るのではないだろうか。

今回、ラウンドテーブルに参加させて頂き、現場の先生方の生の声を聴かせて頂くことが出来た。それぞれの学校の取り組みの多様性や共通して持ち合わせている学びへの意識を知ることができたと思う。専門や職業という垣根を取り払った意見交換の場の

重要性を認識するとともに、「コミュニティ」や「繋がり」という言葉の持つ意味を再度考えていく必要

があると感じた。

〈異人〉たちの交響へ — 埼玉県立新座高校の改革

埼玉県立新座高校教諭 金子 奨

埼玉県立蓮田松韻高校校長・前新座高校校長 柿岡 文彦

教師と子どもの〈学び〉を核にした学校改革の必要性が叫ばれて久しいが、高校の改革はなかなか進まない。それは、〈学び〉を阻害する要因が、とりわけ高校に根強く作用していることを物語るだろう。

〈学び〉を阻むものは、「受験」を口実とした教師の一方的な「教え込み」である。〈教え〉は〈学び〉を誘発し、〈学び〉に補完されてはじめて実現するものだが、「教え込み」は教師の視点とことばで教室の隙間を埋め尽くしてしまい、〈学び〉を窒息させる。そこでは他者のまなざしと声が奪われている（金子奨『学びをつむぐ』参照）。

他者がいないということは、そこが一義性に支配されたプライベート・ゾーンであり、私物化された空間であることを意味する。管理職・担任・分掌・組合・学年等々による私物化が、〈学び〉の生ずる隙間を学校から放逐する。〈学び〉の核心をなすものは対話であり、対話は他者との相互的な〈あいだ〉に生成するものだから、隙間のない親密圏では〈学び〉の可能性は薄い。私たち二人は、そのような意味での〈学び〉の実現が難しい学校に同時に赴任した。柿岡は校長として、金子は教諭として。金子は、協働的な活動を授業に導入し、そこに学生、院生、研究者、他校の教師たちを招き寄せ、それ以前とは異質なまなざしとことばを学校に呼びこむ媒体となる。他方、柿岡はその動きに触発されつつ、校長室のソファを楕円のテーブルに替え、そこを教師や生徒との対話の場へと転換させていく。

肝心なことは、対話のさなかに柿岡が、学校の管理者ではなく、教師の教師としての校長へ、よき学び手へと自らを変容させていったことである。ゆたかな資質に恵まれた学校図書館司書と出会い、読書の領域と量を格段に上げつつ、「何でも見てやろう」という姿勢で学校内を歩き回り、教室に出入りし、あるいは、外へと出かける。校長の呼びこむ外部の風が、学校に新たな可能性を孕ませていく。

こうして二人は、境界線上に立ち続ける〈異人〉として内と外を媒介し、学校を定常開放系のごとき動的な場へと変えてきた。もちろん、二人のこの〈異人〉性は、抵抗と軋轢を生み出すことになるが、それは課題と改革の方向性を明確にする過程でもあった。

3年の紆余曲折をへて辿りついたのは、授業の公開と子どもの学びに寄り添った授業研究会の創出である。

授業公開は教室に他者のまなざしを入れ、研究会ではさまざま異なる声が響きあい、教室と職員室を交響／公共圏へと確実に変容させてきた。

学校は、外の圧力だけでも、内側の動きだけでも変わらない。内と外の往還こそが、教師をたがいに異化する学び手へ変貌させ、学校改革を駆動させていく。そして、〈異人〉たちの交響／公共性こそが教室に〈学び〉を再生させ、学校改革の道筋を明らかにしていくのである。

新座高校の4年間の軌跡は、その事実を如実に物語るだろう。

福井ラウンドテーブル 2011 に参加して

教職専門性開発専攻コース 2年 小出 哲也

教職大学院に入学して早 2 年がたち、2 月 27 日のラウンドテーブルで 2 年間の実践を報告した。昨年度は、主に聞く立場だったが、今年度は発表ということで上手く話せるか不安があった。ラウンドテーブルの良い点は、異なる学校種、異なる教科の方の実践報告が聞け、討議できることである。同じ学校種や同じ教科で話した方が良いとの意見もあるかもしれない。その考えも正しい。ただ、異なる人に実践を伝えることで再度自分の実践を振り返ることができるし、異なる立場の実践を聞くことにより自分の実践に新たに活かすこともできる。それだけ、視点が広がるのではないだろうか。それが、福井県内だけでなく福井県外の方の報告も聞ける。このような場は福井大学のラウンドテーブル以外なかなか存在しないと思う。まず私の報告の内容を振り返りたい。2 年前、家庭で深刻な問題のある児童との関わりから、どのような児童にも学びたい、知りたいという思いはあるということを感じた。そのような経験からどのような児童・生徒に対しても、学習することが楽しいと思えるような授業力をつけたい、教室を楽しい学びの空間にしたいという思いから教職大学院を志望した。そして、2 年間の長期実践報告書のタイトルを「子どもが楽しく学べる授業づくりをめざして」にした理由としては、どんなやり方にせよ児童が学習するのならば、子どもが楽しんで授業を受けられるのが最善だと考えていたからだ。子どもが「学ぶことって楽しい。もっとやりたい、知りたい。」と思うことを大事にしたいと私は考えている。そのために、授業者はどのような授業づくりが必要か、2 年間参観して気づいたことや、実際に授業を実践して感じたことを報告した。

失敗し試行錯誤することでしか、授業力は伸びないということを教えて頂き、途中からインターンシップは過去の経験や新しく学んだことを自分なりにアレンジして実践する場であることを感じた。失敗を恐れずどんどんと挑戦しなければもったいないと

感じるようになった。インターンシップ 1 年目での前半でのこと。4 年生のクラスで実習を経験したが、ここで印象に残っていることは児童一人ひとりが自分のクラスに対して行う役割は何か、それぞれに考えをもっていることであった。つまり、決して人まかせにはしていないことである。他人の意見に耳を傾け、自分の意見をしっかりとつ。グループで協力したり、注意しあったりする関係性を大事にする。個人の問題はクラス全体の問題として考える。とにかく、クラスの和やつながりがあるクラスだった。授業を参観させてもらったが、児童にとって身近なことを導入で設定していた。そして必ず児童を迷わせる課題を設定していた。この迷いというものを授業の中で大事にしていかなければならないと感じた。求める答えは一つかもしれないが、そこにたどりつくまでの方法は何通りもある。それを、みんなで考えたり意見を戦わせたりすることによって、判断力が高まったり、コミュニケーション力も培えたりすると思う。インターンシップ 2 年目でのこと。ここでは、グループ学習の支援の仕方を学んだ。机間支援の方法について悩んでいたが、ようやくどのように支援したらよいか自分なりの方法を見つけることができた。まず、グループでの活動が活性化しているのか停滞しているのかを見極める必要がある。そして停滞しているグループにはどこまでできているか説明させ、どこで悩んでいるか言葉にさせることが大切である。その意見を聞いた上で助言をすること。そうすることによってグループ学習が活性化していく。子どもが意欲的に学習に取り組むことができると感じた。ある大学の教職大学院の先生は、学生が 1 年から 2 年間インターンをするのは画期的だとおっしゃってくれた。また、現職の先生方も研究テーマが分かれていて総体的に学ぶことはできないと聞き、自分たちはめぐまれた環境の中で実習できたことを感じた。しかし、私の発表を、グループの方々共感的に聞いてくれる一方で厳しい意見も出

た。去年卒業された先輩からは、まだまだ自分の視点と向き合っていないと厳しく指摘された。人から言われたことを納得していないのに自分の言葉にしているとのこと。まだまだ課題だらけである。指摘された部分を今後、克服できるようにしていきたい。ラウンドテーブルで実践を報告することによって、今までやってきたことを改めて振り返ることができた。報告をしながら、自分の中であの時はこうすればよかったのではないかとその場で再構成している自分がいた。

他の先生の話を通して感じたのは、常に現場にはさまざまな問題が横たわっているということだ。どの先生もそれを解決し良い方向にもっていこうと必死である。その解決策として元至民中学校校長の山下先生が、「前例踏襲は良くない。やれるところを少しずつやっていく。変えられるところを少しずつ変えていく。とりあえずやってみよう」と声をあげることが大事。」という話をされた。今後自分がそのような場面に会ったらどうしたらよいか考えさせられる。このラウンドテーブルでは、環境は違えど

自分の学校や実践と照らし合わせながら話が聞けるのである。また、学校全体で協働して取り組んでいくことが大事だということも感じた。そういう意味からも、他の先生の実践を真っ向から否定するような環境ではなく、気軽に相談できる環境こそが望ましいということを経験から実感した。

正直、今まで、教職大学院で取り組んできた合同カンファレンスやラウンドテーブルは本当の意味でその意義を見い出せずにいた。ただ、2年間を終える今、今回のラウンドテーブルにおいて長期実践を報告にするにあたって、学校種、教科を超えて報告を聞きあうことの意義をようやく理解できたように思う。環境は違うけれど、思いはみんな同じである。

「良い授業をしたい。良い学校にしたい。でもどうしたらよいか分からない。」だから、悩みながら試行錯誤すると思う。いろいろな実践を聞いて、参考にしたい。そして自分の悩みを共有したい。今回のラウンドテーブルを通して、実践・省察(振り返り)・語りの重要性が腑に落ちた。

Newsletter No.97(17.6.9)より

社会に開かれたイノバティブな中等教育の挑戦

特別企画フォーラムを終えて

富士市教育委員会 富士市立高等学校教育推進担当 遠藤 健

「財政教育プログラムは、どのようなイノベーションをもたらしたのか。」

教科書がないところからのスタートで、3つの新たな学び方がイノベーションであった。ひとつ目は、「答えのない問いのなかで学校教育と社会教育が協働的に学ぶことができた」こと。本校では、カリキュラムマネジメントをしながら長期に渡り財務省の方と市議会委員の方と学びの協働ができた。学校、行政、企業ともやることができ、生徒とそれぞれの団体に多くの気づきを与えてくれた。財政教育プログラムは、場所と人を選ばず、どこの地域でもどの校種でも取り組むことができる教材である。

ふたつ目は、「生徒自ら主体的に学ぶことができた」こと。切り口としては財政だが、社会の仕組みを自分ごととして考えることができる。財政はすべての人の将来に関わることで、自分ごととして捉えやすい。生徒が自分ごととして捉えることで学びは加速していく。財政は、社会の課題・自分の課題・学習の課題の接点にあり、社会の仕組みについて将来に渡り問いを持ち続けることができる。主体的に社会に関わる視点が持てたと言うことだ。またそれは生徒自ら主体的に学ぶ「主権者教育」ができたことを確認することができた。

3つ目は、「必然的に世代を超えて学ぶことができた」こと。個人の考えだけでは限界があり多角的視点と批判的思考が自然と入り込む。「なぜ? どうして?」が生まれやすいためまわりに聞きたくなる。「自分の地域は? 都道府県は? 日本は? アジアは? 世界は?」と問いを広げ課題の設定が変化していく。課題が変わると関わる人が変わる。生徒の中には、自分のおじいちゃんに話を聞いたり、親戚のお姉さんに話を聞いたり、聞いた内容を財務省の方や市議会議員の方に問いを投げかけたりしている生徒がいた。10年後 30年後 50年後をリアルに考え、多角的な視点で思考をはたらかすことができていた。

以上 3つが新たな学び方であり、学びのイノベーションだと感じた。生徒も教諭も協働先も、ともに

未来を考え能動的に学ぶことができた。また、「学び方だけではなく財政の視点・知識は探究的な学びの導入部分で必須である」と感じた。マインドセットの大きなひとつの要素あると言うことだ。では、生徒は何に気づき何を得たのか。生徒の振り返りには、次のような社会で必要とされる力に自ら気づく姿が見て取れた。「現状把握力・批判的思考力・協働的思考力・創造的思考力・状況判断力・知識活用力・傾聴力・計画修正力・アイデア創出力」、またその背景には「社会のために」という基盤を持つことができていた。それだけではなく、「倫理」という視点も入り、学びを広げていく可能性を十分感じることができた。

保幼小教育フォーラムに参加して

愛荘町立秦荘幼稚園

矢守 大智 西川 絵理 今居 静香

今回、保幼小教育フォーラムに参加させてもらえたことは私たちにとって、とてもいい刺激となりました。私たちが得たものとして、三点のことがあげられます。

一点目は、伝え方の重要性です。ポスターセッションを初めてさせていただきました。多くの方が聞いてくださり、嬉しかったのと同時に伝え方が未熟だと感じました。他の校園の発表を見ていると、丁寧に、聞きやすく話されていました。これは、園で、職員同士で話をする際や、他園との交流を図るときに、活かされるのではないかと思います。

二点目は、互いに学びあう姿勢です。話題提供を受けて、盛んに意見交換されていた様子がとても印象的でした。また、互いの実践に敬意を示しておられ、さらに深まるにはどうすればいいのかを考えておられました。話を聞くだけではなく、それを受けて、どのように自分たちが実践の中で活かさせていけるだろうかと考えておられるからこそだと思います。今回、話題提供してくださった、小学校での実践はとても興味深く、小学校だけでなく園でも意識でき

る視点がたくさんありました。その実践も、いろいろなところに学びに行かれたことで実践しようと思われたと聞き、自ら学ぶことはとても有意義なことを得られると感じました。互いに学びあうという姿勢が今後私たちも見習っていききたいところだと思いました。

三点目は、教師の熱意や向上心がとても大切であるということです。このフォーラムに参加されていた方は、よりよい教育を目指すために参加されている方ばかりでした。私たちは、道半ばですが、その中でこれからどのように教育に携わっていくべきなのかを学ばせていただくことができ、意欲にもつながりました。ある園の発表では、自ら学び、園の改革をされている様子を教えていただきました。熱意をもち、現状に満足しないですらに向上心をもって取り組まれていました。このような姿勢をこれから大切にしていきたいと感じました。

今回学んだことを活かして、職員同士が意欲をもって日々の保育をよりよくする取り組みができるように共有していきたいと思います。

福井大学ラウンドテーブルに参加して

福井市六条小学校 5年1組 谷本 咲良

わたしは、福井大学の13階の会議室で総合の発表ができてうれしかったです。12月に六条小学校で行われた収穫祭で、地区の方達や全校に発表したけれど、それとはちがった緊張がありました。他の小学校に向けて発表するので、収穫祭の言葉を手直しし、六条の米作りやお酒造り、新生姜についてみんなで担当を決め直して発表しました。私が選んだところは、新生姜の葉っぱを観察したことや、新生姜の甘い蜜でホットケーキを作ったことについてです。私の中では大成功でした。越廼小学校の六年生がたくさん感想を言ってくれたので、「私も、この後、しっかり越廼小学校の発表もきこう！」と思いました。越廼小学校のお友達は、六条の新生姜やお米についての活動と、自分たちの越廼のへしこについての活動とを比べながら聞いてくれたのがよくわかりました。レシピ作りや地区の方達とのかかわりなど、共通点もありました。同じ産業でも、それぞれの地区のさかんな産業が農業と漁業ということで、そのことについても発言してくれました。スクリーンを使っての発表は六条だけで、他の学校は模造紙に書いてありました。越廼小学校は地区の祭りで踊った

へしこの踊りを踊ったり、チラシを配ったり、へしこのキャラクターが登場したりと、いろいろ工夫があったのでまねしてみたいです。

午前中の発表が終わってから、越廼小学校の子とお弁当を食べたり話し合ったりして、仲良くできたので、「福井大学に来てよかったな。」と思いました。越廼小学校の行事や習い事など、発表とは関係ないこともたくさん話し、とても楽しめました。交流タイムでは、「越廼のへしこと六条のお酒をセットで売り出したい。」「六条の美味しいお米とへしこで、へしこ茶漬けを食べてみたい。」「越廼のへしこと六条の新生姜のキャラクターを作り、キーホルダーにして売り出したい。」など、お互いの総合の取組が、もっと広がる努力をしようということになりました。

今回の活動を通して、他の学校のとりくみを聞くだけでなく、仲良くなったり、自分たちの総合の活動について意見がもらえたり、とても楽しい時間を過ごすことができました。

Zone A 学校 sessionⅢ フォーラム 参加報告

札幌大通高校 教諭 富田 晃平

フォーラムで一緒にテーブルを囲んだ福井大学教職大学院の荒木先生から、参加しての感想を書いてもらえないかというお話をいただいて、ちょっと戸惑ったのですが、一緒にお話をした先生方そしてこの場をつくって下さった皆さんへのお礼の意味を込めて報告させていただきます。

Zone Aは、教師のコミュニティ、支え合い、学びあいをテーマに三つの実践レポートがあり、その後、小グループに分かれての意見交換を行いました。私のグループは現在大学院生でもある中学校の先生（兄貴的なバリバリの中堅）、保育士3年目の先

生（悩みながらも明るく前向きな若手）、4月から教員になる大学生の方（希望と不安を胸に抱く次世代の担い手）、そして私（ややくたびれたおじさん高校教員）さらに途中から教職大学院荒木先生（池上さんのような鋭い指摘をビシビシ）と、多様な構成でした。（注：カッコ内は私の受けたイメージです。ご了承下さい。）こういった顔ぶれで話ができること自体、貴重な経験であり、また異なる立場ながらそれぞれに子どもに向かう思いを共有し、非常に嬉しいひとときでした。

session II では教師が学べる場を組織的につくるという観点で具体例が示されましたが、我々の話し合いの中では、組織化と共に普段のちょっとした会話、相談といったことが大きな役割を果たしていることも指摘されました。おそらく、組織的な取り組みと日常のコミュニケーションは教師のコミュニティを支える両輪であり、双方が補完的な役割を果たすものだと思います。若手の先生からは、「わかってないなど思われるのが嫌で聞けないことがある」、中堅の先生からは「もっとよいアドバイスができないか

ともどかしく思うことがある」とそれぞれの本音も交わされ、そういった意識もみんなで共有していくことがよりよい教師コミュニティづくりにつながると感じました。

今、学校で普段の仕事に戻り、再び目の前の課題にあたふたと対処する日々ですが、ふとラウンドテーブルのことを思い出すと、一生懸命な先生方の様子が浮かび、励まされます。私も全国各地で奮闘する「チーム教師」の一員として頑張っていきたいと思います。

「省察的協働探求との出会い」

共同コンピュータ 会長 兼 グローバル福井 代表取締役 吉村 一男

2017年2月、初めてラウンドテーブルに参加させていただき、省察的協働探求と出会いました。福井大学附属中学の第9期卒業生ながら、最近まで「福井型教育」について知りませんでした。私はシンガポール在住20年を超え、その前のニューヨーク、香港と合わせると人生の半分を、また18歳で福井を離れてからの3分の2を海外で暮らしています。世界に冠たる教育先進国シンガポールの教育省が、現役教師20人以上を福井に視察に送ったと知ったのは一昨年です。それから附属中学の2年先輩三田村彰先生との再会をきっかけに、ラウンドテーブル参加の機会を得ました。

省察的協働探求、英語では Reflectional Co-Inquiry でしょうか。従来型教育が教師から生徒への知識移転を中心としたことに対し、21世紀型グローバル教育が、生徒の自主的な知識吸収と理解を深めるための発信と学ぶ者同士の繋がりが中心で、教師はファシリテーターであるべきことを鑑みると、正に省察的協働探求はその中核にあると思います。また、それは福井型教育の中心概念であるようにも感じます。

省察的協働探求は学校現場だけではなく、会社、役所、ボランティアなどあらゆる組織で普遍性を持

つと考えられます。株主利益を最優先する資本主義が手詰まりになる中、会社はその構成員(社員と家族、関係先、顧客、地域、投資家)が幸福を追求する教育現場でもあることを、経営者の端くれとして肝に銘じたいと思います。また、グローバリズムの負の側面が浮かび上がる一方で、正の循環を取り戻す方法の一つが省察的協働探求にあると考えます。

シンガポール人の妻との間に二重国籍の男女二人の子を持つ父としても、故郷福井とアジアのハブシンガポールを直接繋ぐことをライフワークと考えています。シンガポールは直近のPISAで読解力、数学、科学的リテラシー3部門の頂点に立つなど、高い教育力には定評がある一方、その徹底した能力主義には危うさもあり、また最速であった日本の倍のスピードでこれから進行する高齢化社会を前に、人生100年時代の生涯教育モデルを模索しています。福井型教育とシンガポール型教育が、省察的協働探求を通じて、生涯教育を含む21世紀型グローバル教育のベストモデル構築に繋がることを夢見て、いや、お役に立つことを目指して、次回ラウンドテーブルにも是非参加したいと考えています。

実践研究 福井ラウンドテーブルに参加して

長崎県教育センター 指導主事 柳本 ますみ

コートを持つことを忘れるほどの暖かさの長崎を出発し、JRで特急と新幹線を乗り継ぎ、途中特急サンダーバード号から雪景色を見ながら約7時間かけて福井に到着した。

1日目のセッションでは、ZONE B1「管理職養成の今日的な意義を考えるー教職大学院の可能性と課題ー」に参加した。教員の年齢層がいびつな現在、将来の管理職層も薄くなっており、その養成は喫緊の課題である。この課題に向けて、現在各大学においては、「チーム学校」のリーダーとして学校をマネジメントする校長に必要な力とはどのようなものか、さらにどのようにしてその力を伸ばすかということが検討され、それをもとに様々な取組みが行われている。セッションの最初に行われた話題提供では、その各大学の取組みが紹介された。

大阪教育大学からは、以前からあった現職教員のための夜間大学院や新しく改編したマネジメントコースでの学びについて、岐阜大学からは実習を重視した学び、兵庫教育大学からは将来の教育長を養成するコースが紹介された。なかでも、兵庫教育大学の日渡教授から示された変革型のリーダーの分析に

関する話題は特に興味深かった。さらに、福井大学からは教育委員会や学校の連携を密にした現職教員の学ぶシステムが紹介された。「学校の中で学ぶ」ことを基本とし、校長先生もスタッフとなり学校の課題に取り組む院生を育てるというものであった。大学と教育委員会、学校が一体となって教員が学ぶしくみづくりを進めている事例を知ることができたことは、私自身の大きな収穫となった。

各大学からの話題提供に続き、グループごとの意見交換が行われた。2日目のラウンドテーブルでもそうであったが、ファシリテーターの方の進行が素晴らしかった。メンバーの意見を引き出したり、気づきを与えてくださったり、深まりのある有意義な時間を過ごすことができた。

また、期間中会場のあちこちで活躍しておられる福井大学大学院生の方の生き生きとした姿が印象的であった。まさに「学び続ける」教師の姿であった。このような「学び合う」しくみづくりが長崎県においても進められるよう微力ながら努めたいと思う。

この2日間は、多くの方と対話し、自分自身と向き合い、新たな視点を得た貴重な機会となった。

あらためて自分の実践を見つめ直す機会

静岡大学教育学部 教育実践学専修2年 岸本 大地

この度は、16年の伝統あるラウンドテーブルに参加させていただき、ありがとうございました。まだ大学2年生で、他大学の学生とはまだ一度も関わったことのなかった私にとって、初めて顔を合わせる学生同士で自分たちの実践を語り合うというのはハードルが高く、やり遂げられるかどうか不安でした。しかし、いざセッションが始まると、同じグループになった他大学の学生が気軽に接してくれ、彼らもまた同じ教員を目指す仲間なのだと感じる事ができたので、自分の実践について自信をもって発表することができました。このような経験を大学2年生

から経験できたことは、将来教員になるうえで強みになると思いました。

また今回は、他大学の学生の実践を聞き、自分の実践と比較することで、自分たちの活動の成果や課題を明らかにするという目標を立て、このセッションに臨みました。グループでのディスカッションを通して、他大学でも様々な実践が行われていることを知り、子どもたちと関わっていく中で生まれる成果や課題には共通している部分が多いことが分かりました。一方で、自分たちの強みとしてあらためて認識できたことがあります。それは、実践を振り返

ることの大切さです。私が所属する教育実践学専修では、小学校での活動後、その日のうちに全ての学年が同じ教室に集まり、自分の実践を振り返り、他者と意見交換をする、「振り返り会」を行っています。こうした振り返りの機会は、他大学では行われ

ていない特徴的な取り組みであり、自分たちの実践をより深く見つめ直し、他者と共有し、次の実践の改善につなげていくことができているのだと、あらためて感じました。それに気づけたことが、今回のラウンドテーブルでの大きな成果でした。

福井ラウンドテーブルに参加した感想

上海師範大学天華学院 張麗珺

2017年2月17日～19日、福井大学で開催された「実践し省察するコミュニティ実践研究福井ラウンドテーブル」に参加させていただきました。初めての福井、初めての福井ラウンドテーブルは印象に残ることがたくさんありました。

まず、800名も越えたという参加者の人数の多さに驚きました。実践研究報告をラウンドテーブルの形式で行われることが印象深かったです。18日の午後には、Zone Cに参加し、3つのセッションにわたって、コミュニティの持続的な発展についてみんなで語り合いました。ポスターセッションとシンポジウムでみんなの実践を物語風に聞かせていただきました。フォーラムでは、語り手として、今までの日本語教育におけるコミュニティの発展に係る実践を語りました。19日に、報告者となって、日本文化を取り入れた日本語教育の実践を報告しました。1日にわたって、くわしく実践を語り合うことはなかなか得られないチャンスですし、グループのメンバーの

報告からも学ぶことが多く、とても勉強になりました。

また、大学生の自発的な活動振りも印象的でした。ポスターセッションにも Zone C のシンポジウムにも福井探究ネットワークという初耳の言葉がキーワードとなりました。福井大学教育学部の授業の一端として探究ネットワークが展開されています。大学生が持続的に地域の子供たちと一緒に活動したり、報告用のパンフレットやポスターを作ったりして、実践してきたことを発表する姿もラウンドテーブルのいい風景なのではないかと思います。大学生の実践報告も興味深く聞きました。

2日間のラウンドテーブルはハードスケジュールでしたが、今後の実践につながるものだと思います。

この度は、福井大学の教職員の方々に大変お世話になりました。感謝の意を申し上げます。どうもありがとうございました

同じ「想い」と、違う「視点」で省察すること。

—福井ラウンドテーブルに参加して—

早稲田大学 文学部教育学コース4年 真鍋 京祐

福井大学教職大学院によって実施されている福井ラウンドテーブルに、2015年6月から継続的に参加してきた。学部を卒業し4月から教員となるため、一つの区切りとして、2017 Spring Sessions を中心に、一度まとめさせて頂きたい。

今回のラウンドテーブルにおいて、私のグループには、小学校教諭・中学校校長・高校教諭・学校教育行政職員と、学校現場に携わる方々ばかりであった。私が大学で関わってきた、模擬選挙を中心とした小学校・高校への出前授業実践等について報告し

た。それを通じて感じてきたこと・考えてきたことについて、活動を振り返りながら語らせて頂いた。

私自身、実践を行う中では様々な困難を乗り越えながら展開してきたという思いもあり、ある程度の達成感を抱いていた。しかしながら、異なる視点・考え方を持たたくさんの方々に話を聞いていただき、自分だけでは気づくことの出来なかった改善すべき点やその方策など、様々な意見を頂くことによって、もっとより良い形に発展できるのではないかと、さらなる高みを目指すことが出来るのではないかと、多くの刺激を感じることが出来た。そんな感情が、実践の内容だけでなく、私自身の成長のエネルギーになっていくと感じた。

さて、これまで4度の福井への参加を通じても感じてきたことでもあるが、立場は違えども、教育・子どもに対する思いを同じにするグループでの語りから、再確認したことがある。

どのような活動においても、結局のところ、教育の場面に正解はない。これは現場に立つことでしか本当の意味で感じることは出来ないのかもしれない。そんな中でも、私が大切だと感じることは、ただ実践するのではなく、それを「継続的に」行うこと、そして一つ一つの実践を「振り返りながら」展開していくことである。

それに加えて、私が福井ラウンドテーブルで感じたことの中で、最も重要であると感じたのは、「省察の目的の確認」である。それは普段、実践を構築する中でも、どこか感覚的に行っているものであったが、福井への参加を通じて、本当に大切にしなければ

なければならないのは、「何のために」省察するのかということだと感じた。

多様な背景を持った人が、様々な切り口から実践を構築している。その様を見ると、それぞれの実践が目指すものは全く異なるもののように見える。しかし、実際のところ、それぞれの本質には、子どものため・人々のため・社会のためといった、教育の可能性に根差した「想い」がある。

もちろん、自身の「想い」を大切にすることは大切なことである。あらゆる実践は、それに基づいて行われるものだろう。ただし、それだけではその実践に広がりや深まりはない。活動をより良い形に発展させていくためには、それまでにはない視点を獲得していくことが必須である。

教育というものを同じ目線で捉える人々が、それぞれ異なる方法・手段で実践を生み出し、それぞれの実践を語りながら、それぞれの視点を共有し合っている。そんな人々の集まる空間が、福井ラウンドテーブルには確かにある。

このような、同じ「想い」を持った他者とともに、違う「視点」から互いの活動について語ることが、自分にも周囲にも非常に価値のあることだと感じる。私自身これからも、意識的に振り返りを大切にしていきたい。

学部卒業を区切りとしたが、教員になる私としては、これまで福井で得たものを如何にして今後活かしていくかということが大事だと認識している。新たな経験・視点を積み、一回り大きくなった教育実践者として再び福井ラウンドテーブルに参加することの出来るよう精進したい。

ラウンドテーブル(クロスセッション)に参加して

東京大学 特任研究員 村瀬 公胤

・出会い

もう何回目になるであろうか、今年もまた、福井のラウンドテーブルに参加した。大学院生、教員・研究者、コンサルタント等々、参加するたびに自分

の肩書きは変わっても、このラウンドテーブルが学びの場であることは、不変である。

考えてみれば、ラウンドテーブルで出会える人々もまた、属性が様々である。ただ一つ「学びたい」という気持ちだけを共通の持ち物として卓を囲む、

一日かぎりの仲間がそこにいる。そのためなのか、ラウンドテーブルの学びは、いつもなにか純粹で静かな喜びに満たされるような気がする。

・振り返り

実績を積んできた方が、過去の自分を振り返る。時に痛切な悔恨さえも含むその語りに耳を傾け、教師として生きることの深さ、果てしなさに思いを巡らす。これから校内では中堅を担い、後進を育てるであろうその人は、しなやかな優しさで導いてゆくにちがいない。

夢を持つ若者が、迷いを吐露する。ほんとうに正しいことって、どれなのだろう。いや、正しいかどうかを、私が決めてもよいものかさえも分からない。そう、そうなんだよねと、私たちは頷き合う。迷うということほど、真理に近いものはないと思う。

新しい試みに躍動する人が、その奮闘の風を吹きつけてくれる。まるで私たちもそこにいるように、ともに驚き、ともに喜び、ともに胸を熱くする。良き仲間に触れることは、私たちの成長の糧である。関わり、巻き込むことで、また次の挑戦が生まれるのだらうなど、期待が膨らむ。

・学び・

なぜ、出会いのあるところに、学びが生じるのか。化学変化とか相互作用という見方もあるかもしれない。しかし、このたび体験したのは、それともやちがうような気がした。属性を離れたとき、人はこうも自由になれるのかと感じた。「私」という殻が外れた、生身の感覚がある。耳は、鼓膜という繊細な皮膚でできた器官である。文字情報では捉えきれない、伝えたいことの総体を、まるごと受けとめる対話、ラウンドテーブルの愉しみ、聴くことの歓び。

※ご所属は当時のものです。

福井大学基金にもとづく
福井大学教職大学院
次世代教育創成資金

明日の学校をつくる協働の実践と探究を支えるために
明日の教師の学びを支えるために

次世代教育創成資金に
ぜひご協力ください。



詳細はパンフレットにてご確認ください。

次回 ラウンドテーブル 2018 Spring Session 開催予定

2018年2月16(金)～18(日)日

教職大学院 Newsletter

No.99

2017.6.23 発行

編集・発行・印刷 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻 教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp